

5 生 活 科

富村 誠・上之園 強・川崎 一郎

1. 個が生きる生活科学習づくりと評価の実施

【 生活科の指導理念 】

子供達に「生活」をもたせ、子供達の価値観を軸にして学習展開を図る。その生活の場で、「生きる力」を子供達自らの手でつかみ取らせる。

1)

本校では、子供達が自分自身の手足を使い、自分の意志や感情で生きていこうとする力を育てることを志向した生活科学習を実践してきている。これからは、私達が、どのような子供の姿をめざし、学習づくりのポイントや評価の実施をどのように考えているかについて述べる。

(1) 個が生きる子供の姿と学習づくりのポイント 2)

【 生活科で期待する子供の姿 】

自分とのかかわりのなかで身の回りの社会や自然をとらえ、働きかけ、集団の中で他の子供達とかかわりながら、自分自身を見つめ、生きる力をつかみとっていく。

- 自分の身のまわりの変化や様子やできごとに関心を持って生活できる。
- 目や手や体を使って、身のまわりの変化やできごとに関心を持って働きかけることができる。
- 見たり感じたりしたことをよく考えて工夫しながら表現できる。
- 友達と支えあって、自分の役割を考えながら行動できる。

【 生活科学習づくりのポイント 】

一人一人の子供の実態
(現在の姿)を認め、学
習展開に生かすこと。

一人一人の思いや願いに
基づくめあてや多様な活動
の場を設定すること。

集団の中で、子供が、自分自身
や他の子供のよさに気づくことが
できる場を設定すること。

(2) 個が生きる生活科学習づくりにおける評価

生活科における評価とは、学習成果のランクづけでなく、子供の学習状況やつまづきの診断と子供の力をより以上に引き出すための手だてを発見するために行う、教師の支援活動の一環であると考えられる。支援者としての教師の役割は、学習成果を測定して順位を決定する「審判」ではなく、「コーチ」のそれであると言えよう3)。

私達が生活科学習づくりにおいて大切にしたい評価は、学習の過程で《一人一人の子供が、それぞれのめあてに向かって、どのように気づき、活動しているか》を見取り、どのようにすれば子供の力をより以上に引き出すことができるかを考えるためのものである。評価にあたっては、次の三点を中心に実践研究を進め、子供の学習状況の把握や個が生きる支援に努めたい。

- ① 学習活動の目指す方向や内容に対する事前検討を重視する。
- ② 限定的な評価(減点主義)でなく、仮定的な評価(加点主義)を行う。

「○○できたか」 → 「どのように(な)○○するか」

- ③ 長期にわたり継続的に評価内容を蓄積する。

2. 自己を高める評価力を育成する生活科学習をめざして

前項では、「評価」を主に、支援者としての教師が行う「教師評価」の意味で述べた。本年度研究テーマ『自己を高める評価力の育成』を生活科学習へ具体化する前に、『評価力』と「他者評価－教師評価・相互評価」「自己評価」とについて、私達なりの区別について述べておきたい。

(1) 能力『評価力』と評価主体による分類「他者評価－教師評価・相互評価」「自己評価」



ある一人の子供を中心に、先の用語を位置づけてみると、左の図式のようなになる。⁴⁾『評価力』は、子供の内にあって、現実の自分のすがたを点検して捉える能力のことである。他方、「自己評価」は、このような点検活動を行う主体が自分自身であることを示し、「他者評価」は、自分にかかわる点検活動が他者－教師及び他の子供－を主体として行われることを示す。その意味で、自己評価すれば評価力が育成されるのではなく、他者評価で与えられる情報も評価力を左右するものだと考えられるわけである。

(2) 自己を高める評価力を育成するために

① 生活科学習における「自己を高める評価力」

《自分の関心については話せるが根拠が弱く》《興味・関心は持続するが拡散的である》低学年の学習特性⁵⁾からして、自らの学習活動全般について振り返ることには相当の無理が予想される。低学年の子供達にとって、「自分を高める評価力」とは、活動の大きな区切りごとに、例えば「楽しかったかな?」「がんばれたかな?」「友達となかよくやれたかな?」と振り返り、次の活動は(も)「楽しく・がんばって・なかよくやろう」という意欲を持つことだと考える。

② 自己を高める評価力育成の方途

ア めあてにもとづく活動の連続性を保障する学習づくり。

前項(1)で述べた学習づくりのポイントをふまえ、子供一人一人が自らの学習を自然に振り返ることができる場として学習展開を図る。《学習のめあてを育てる・めあてを追求する・めあて達成》の場づくりが不十分では、先の「楽しい・がんばる・仲良く」も浅いものになってしまう。

イ 自己を高める評価力を育成する教師評価、自己評価、相互評価の実施

(ア) 教師評価について

学習の活動や日常場面のなかで、子供の「よいところ」「よくなったところ」を見取り、意義あるものとして積極的に方向づけていくことに力点を置く。支援者としての教師は、子供の活動への意味づけ・意識づけを行うことが大切である。

(イ) 自己評価・相互評価について

「楽しかった・がんばれた・なかよくやった」→「自分は(〇〇さんは) どうしてうまくいったのかな」、「楽しくなかった・がんばれなかった・なかよくやれなかった」→「自分は(〇〇さんは) どうしてうまくいかなかったのかな」と、活動の結果を反省し振り返る場面を、小単元・単元といった活動の大きな区切りを目安に設定することに力点を置く。その際、単に質問紙(カード)を配布するだけでなく、それまでの学習物を併用したり、発表・展示する活動とかかわりを持たせたり、何でも言い合える受容的な学習の雰囲気づくりのもとで行ったりという支援に努めたい。

……… 註 ……

1) 『個が生きる授業』 広島大学附属東雲小学校教育研究会, 出版ヤマワキ, 平成3年, 107頁。

2) 同上書 109頁。

3) 小原友行「自己学習力を育成する社会科・生活科の授業創造」(平成4年度 広島市社会科夏期研究大会における講演資料) 5～6頁。

4) 高野清純監修『図で読む心理学 学習』 福村出版, 平成3年, 178～183頁を参照した。

5) 『めあて追求の授業』 広島大学附属東雲小学校教育研究会, 第一法規, 昭和63年, 58頁。